

ジュニトケ、



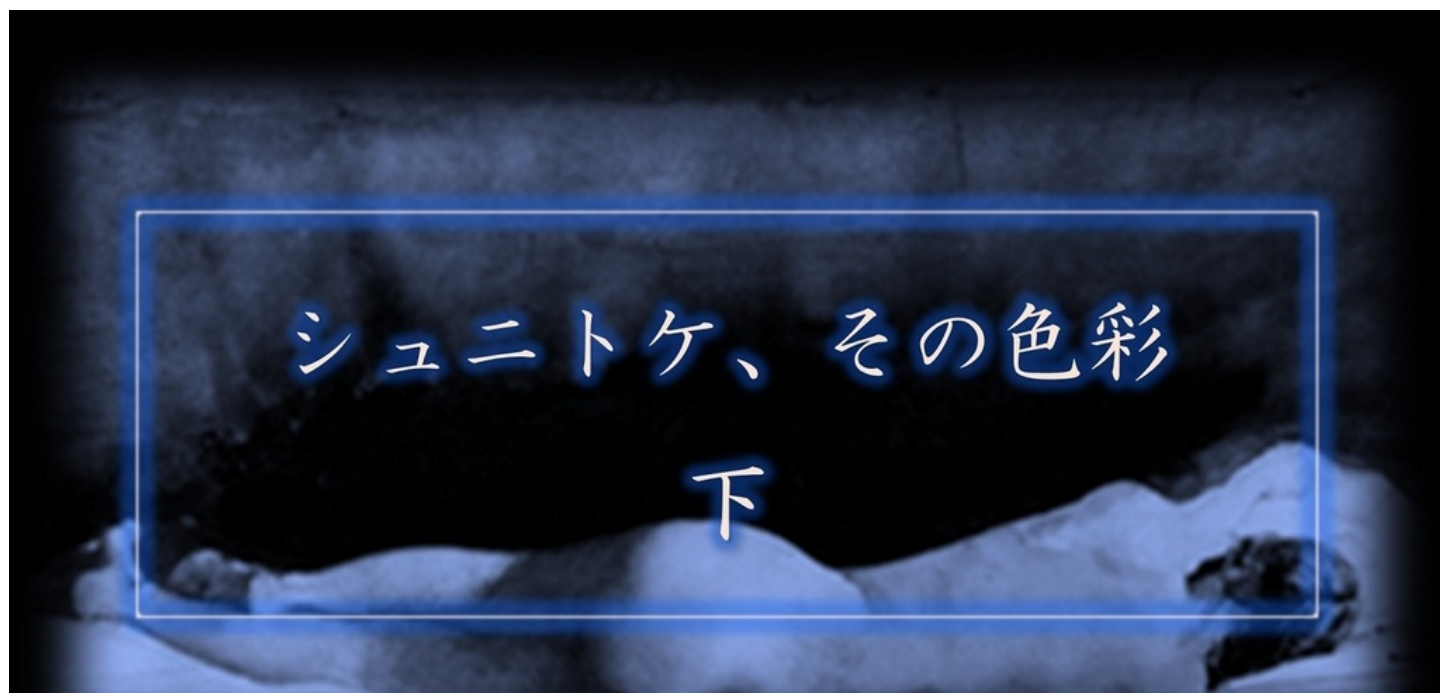
その色彩

下

色彩 下  
…オイディプス王

Οἰδίπους τύραννος

必ずしも、雨が降る必要も無かった。十分に潤っていたから。旧正月周辺の時期に、雨は一日中降りしきるものだった。曇った空が斑らな白濁した気配の中に町を包み、必ずしも泣く必要も無かった Trang チャン の涙が、その瞬間一気にその両目から零れ落ちたのを、Mý ミー は最早見逃す事ができずに彼女にしがみつこうように、そして Trang はその腕に抱かれた。Au アオ は不在だった。どこかで、誰かと遊び歩いているに違いなかった。眼差しの向こうに雨に濡れた街路樹が道路の尽きるまで広がっていたが、雨から守るように抱きしめた Trang を屋内に連れ込み、シャワールームで濡れた体を洗ってやった。カフェに客はいなかった。濡れた Trang を誰にも見られずにすんだことに Mý は満足した。



美しい Trang は濡れても美しいので、見られることには何の支障も無かったが、濡れた Trang を見せるのだけはいやだった。みずぼらしく、ふしだらだから。濡れた服を脱がそうとする Mý に嫌がる仕草をした Trang の頬を軽くひっぱたいたとき、彼女はふたたび泣き出すかもしれないと思った。Trang は Mý を見つめるだけだった。泣きだしてしまっていたのは Mý だった。Trang をひっぱたいて仕舞った時、そのどうしようもない暴力の痛さそのものが直接彼女の神経に触れて、涙を決壊させた。Trang の美しい身体をシャワーで撫で廻しながら、Mý は彼女の絡みつく腕に気が遠くなる。接近しすぎた近さの中で、最早 Trang の身体の形態はぼやけた色彩として濁る。Au が最初に手を出したのは Trang の方だった。いつだったか死者のための記念日の祝いの準備で朝早く起きた Trang が薪に火をつけようとしているときに、かがんで息を入れる Trang を後ろから抱きしめようとしたが、Au が何を求めているのか Trang は知っていた。汗ばんだ体が自分の体臭を発散させているに違いないことを恥じながら、Trang は身をもがいて拒絶したが、Au が不意に立てた笑い声に軽蔑的な表情が混ざっている気がして、Trang は彼をひっぱたきさえしそうになった。ただそれだけだったものの、Tuyêt トウイエット かThiên ティエン が見ていたに違いなかった。隣の家の鶏が翼をばたつかせ、啼き、なんにも、まったく無関係なのに、と彼女は笑った。Au が立ち去った後に出てきたTuyêt の責めるような無言の眼差しが、もはや Trang を監視しているのに Trang は気付いていた。Au が自分に触れたときの体温の記憶があった。Mý に気付かれるだろうか、それを回避しなければならない思いと、単純に彼女に打ち明けてしまいたい欲望とに駆られ、Trang は Mý の、Au への気持ちは知っていた。美しい男だった。男性的な肉体は筋肉の硬い繊維を張り巡らして、彼の手は彼女たちの手の倍近くで、血管を浮かび上がらせていた。その手が嫌いだと Mý は言ったが、Trang は好きだった。他人のそれとして彼女は愛し、Mý の嫌悪は、Au のそれが自分のそれだったらと言うありえもしない妄想が作り出した感情に他ならないことに、Trang は気付いてさえた。Au の浮かび上がった血管には暴力の匂いがした。なにかを破壊するための、なにかだった。Mý が彼と関係を持ったことを Trang に告げたとき、Mý の、自分にわびるような眼差しと、勝利者の矜持がない交ぜになった表情の恍惚に、我慢できなかった Trang は、一瞬のみじかい沈黙と、執拗な凝視のあとで彼女をひっぱたいた。彼は、と Trang は言った、私の夫です。Trang が駆られた憎しみのただならなさを Mý はひっぱたかれた後で上目遣いの眼差しの中に確認し、Au はあなたのもんだ、と言ったのは Trang の方だった。あなたが好きにすればいい。あなたのほうがより多く愛しているし、彼もあなたのことが好きなのだから。そう、いつだった。そう遠くはない過去に。Trang は彼女を黙って涙ぐんだまま見つめる Mý の裏切りを許すことができなかった。Mý の眼が涙をこぼしそうになった瞬間に、彼女の髪の毛を引っつかんでテーブルにたたきつけた。Mý の母親が喚声を立てながら彼女たちを引き剥がそうとしたが、Trang の俊敏さがそれを許さなかった。穢い体だ、と思った。男を欲情させるしか能の無い Mý の体に触れることさえいやだったが、それを殴りつけるたびにその穢い体温に触れた。Au はどこかへ逃げて行った。目を背けたまま、自分の関わり獲ないものから逃げ出そうとするかのように、そして Trang は彼の存在にさえ気付かなかった。Thanh タン が何もわからないふりをして、ただ、カフェの椅子に座って彼女たちの喧嘩を見ていたが、Mý が自分を守ろうとして振り上げた左手が Trang の鼻を殴打し、流れ出した鼻血を Trang は、唇に感じた。Thanh はすべてを知っていた。明け方の、同じベッドで寝ている姉が何をしたのか、彼は全部見ていたのだから。寝た降りをしたまま、閉ざされたまぶたの向こうで、彼らは声をさえたえずに、Thanh はただ重なり合わない息遣いが空間に漂うのを聞いていた。Mý と、Au のそれを。Thanh は自分が、いつかそうなるものだと思っていたことに気付いた。海岸をバイクで走る。そのたびに視界の端に触れる海岸の風景は光の中に白濁して、青さを寧ろ遠ざからせてしまう。波立って、その海の色彩が空の色彩を移したものにすぎないには、Au は、気付いている。水滴と霧の中に白濁した雨の日には、海は向こうまでもひたすら白のグラデーションを曝すのだから。戯れて、わざと企んだ笑みを作りながら Trang が、仰向けになった Au に自分の乳首を含ませたとき、Trang と Mý は顔を見合わせて笑った。声は立てなかった。Au のまぶたを塞いだ Mý の手のひらと接触した自分の皮膚が汗ばんでいるのを Au は気付いていた。舌の先で Trang の乳首を転がして、Trang は微笑みながら幼児のように Au を抱き、重たると膨らんだ乳房に彼の顔を押し付けて、窒息させてしまいそうなほどに抱きしめてみる。間に挟まった Mý の手が汗ばみ、Thanh は向こうを向いて寝た振りをしていく。いつか彼も Au のように女を抱くのだろうか、Trang は訝しかった。小さな子どもの、未だ何も知らない Thanh。ベッドルームの開け放たれた窓から入り込む風が蚊帳を揺らす。夏の温度が肌を汗ばませる。三人の体臭が混ざり、時に Mý はもう一人、Thanh の匂いがすることにも気付いた。Trang が先に馬乗りになって、Au のそれを体の中に入れた。体の中にその存在感が重たると在った。Mý に眼をふさがれたまま、敏感な Au はもがくような仕草を見せた。Trang の乳房に口付けたとき、彼女が息を飲んだのを Mý は聞き逃さなかった。眼を開けようとした Au に Trang が見ないで、という。見てはいけません。なぜ？いつもそうだった。二人は二人の裸を Au に見せようとはしなかった。本当の色を曝せ、と、Trang は思った。海を見るたびに。歯の先で軽く触れている Trang の乳首を咬みきってしまった欲望にいつもよりに駆られ、Mý は Au の手のひらが自分の手のひらをつかんだ瞬間に、不意に恐怖した。海の本当の色彩はどんなだろう？ Mý は彼が引き剥がさないようにいよいよ強く手のひらを押し付け、馬乗りになった尻の下で、Au がもがいているのを感じた。胸を突き出して誇示してみせ、ねじくりまわすように自分で腰を振りながら、Trang は自分が何かの被害者であるかのような、どこかで悲惨な顔を晒した。Mý が Au の子どもを妊娠したかも知れないことを Trang に告げたとき、Trang はあの日本人を家に連れ込んで、一ヶ月たっていた。時に忘れた頃にやってきて、彼女と Au を求めもする Trang は Mý にとってふしだらなだけの女にすぎず、いつか彼女の間違いを正さなければならない気がしていたが、自分の犯したことの重大さに比べればなんでもない気がした。耳元でささやかれたその告白に、まだ確定的な事実ではなかったが、Trang は耳を疑った。どうするの？ Trang は沈黙の後、目もあわせずにいい、カフェの中の疎らな客に視線を投げた。自分たちが育てる自信はなく、それに現実味は無かった。子どもに対する愛着はすでに芽生えていた。単に生理が二ヶ月無いというだけの事実があるにすぎず、子どもはまだ居無用というのに。眼差しの中に、明晰な絶望を撫ぜた。Mý は、Trang の眼差しに侮辱されたような表情がある気がした。Trang は信じられなかった。これから何が起こるのか、立た無い予測に苦しんだ。Mý は表情をなくしたまま何うような眼差しだけをくっていた。目の前の40歳ばかりの客が路上に煙草を投げ捨てた。コンクリートブロックの



上で、火はなかなか消えなかった。赤い海を見た。十二歳の頃だった。ダナン市の海岸に押し寄せた赤潮の極彩色の赤に染まった海を見た。赤いまま浪立って、打ち寄せ、白濁した泡を巻き上げて足元に崩れ去る。空は青いまま、海だけが何の必然性も欠いたまま赤かった。Mý が Au の頭を引っぱたき、Au が立って大袈裟な歓声を Trang は背後に聞いた。Au と Mý 波打ち際でふざけあって彼らの足に赤い海水がじかに当たる。碎け、散り、その舞い上がった水滴さえもが赤い。夥しい微生物の氾濫と共に、今、その色彩の中で多くの魚の群れが窒息しているに違いなかった。潮の匂いに、その命の明らかな息吹の匂いさえ、消し去られてしまいがち。あした、どれほどの魚の、窒息した死体の群れが押し寄せるとか、Mý は恐ろしかった。二人の笑い声を聞きながら、Trang は色彩に見とれたまま、海がついに本当の色彩を曝した瞬間を目撃した気がしたが、Mý はそんな風には思わない。にも拘らずそれらは海の色彩ではなかった。その、おびただしい繁殖の果てに自らも窒息してゆく微生物たち固有の色彩に過ぎない。背後に、横に、人々が海を見て何かを口走っていた。人々にとって初めてか、やっと、ふたたび見る風景だった。背後の海岸線を無数の人々が、立ち止まり、歩き、バイクで走り去りながら、それらの音声が連なっていた。何を言っているのか殆ど聞き取れない単なる音の反響に過ぎないそれに、耳をなぶられるに任せる。潮が匂う。本当なの？ Trang は言いながら、Mý の髪の毛をいじって、Trang にされるがままに、路面に視線を投げたまま Mý は最早言葉を返そうともしなかった。本当に、妊娠なんかなできるの？その夜、日本人の美しい肌を鼻をこすりつけるように Trang は匂いをかいだ。Au の体臭とは明らかに違った。年齢のせいなのか、人種のせいなのか、単なる固体差なのか、気のせいなのか、Trang には判断できなかった。差異する事だけは事実だった。仰向けになって、思い切り息を吸い込んで、腹を膨らませた。背筋を反り返らせて、膨らんだ腹部を誇示して見せた。横で、日本人は声を立てて笑い、Trang は両手につかんだ日本人の顔を自分のそこに近付けた。ベッドの上で身をよじって、Trang が、ベッドの上で開かせた Mý のそこを押し広げ、付けられた鼻が嗅いだ匂いは確かにいつもとは違う気がしたが、この日本人は嗅ぐのだろうか？いつもと同じ匂い。Mý のそれとは違うそれを。日本人の舌が自分のそれに這うのを感じ、その舌が感じているはずの味覚は想像できた。Mý のそれと同じ、はつきりとした酸味のある生ぬるい味覚が、その舌が感じているすべてに違いなかった。Mý にしてやったとき、彼女は身を丸めて触れている舌を確認しながら、Trang は首をよじって Mý の、瞳孔の開いた眼差しを見た。同じ眼差しを自分も曝しているのを知っている。Mý の舌が触れたとき、Au を、あるいは日本人を見つめるときに、その同じ眼を、そして Mý と見詰め合うときにさえ。双子の彼女たちの違いは肌の色の違いにすぎなかった。見つめあいながら、お互いに口付け、指先がそれぞれの肌を撫でて、舌が唇をなぞりあうときに、Trang は知っていた、自分が、そして Mý も、曝してしまうのは同じような、知っていた。彼女たちは、それぞれに、曝されたのは同じ眼差しに過ぎなかったことを。見詰められた眼差しに見えるものは、その彼女が見詰めるものに限りなく近いはずだった。射精したときの、Au と日本人が同じような顔をするのを Mý が未だ知らないことを

Trang は知っている。彼女は Au しか知らない。Thiên ティエンはどんな顔をして Mý に抱かれたのだろうか？彼は彼女に射精したのだろうか？時に思い出す。走らせたバイクの上から、路上に突っ伏した事故を起こした誰かの身体が、たかった人々の隙間から見えたときに。突っ込んだ橋げたのコンクリートに血痕がついていた。手遅れに違いなく、どこかの店の前で、背後に赤ちゃんの悲痛な泣き声を聞いたときに。単なる空腹が不快感の連絡に過ぎない、悲惨を極めた音声が耳から神経を逆撫で、耐えられなくさせる。思い出す。射精した Thiên の表情は、絶望にまみれた人間の、完全な無表情を曝して、その無様さに目を背けたことを Mý は思い出したものだ。Trang は声さえ立てなかった。Thiên が自分の組んだ腕で顔を隠し、もがきもせず仰向けのまま、Mý に強姦されたときに、そんなにまで拒絶しながら、彼のそれだけはちゃんと勃起しているのが滑稽だった。心も何もない生殖機械の単なる覚醒。それは、彼への強姦なのだろうか？彼は汚されたのだろうか？彼が屈辱にまみれているのは事実なのだから、そうには違いなかったが、Mý には違う気がした。それはあまりにも自然な行為であるに過ぎない。反社会的か、反道徳的か、背徳的であるに過ぎないだけで、どうしようもない自然さが付きまとう。彼が傷ついていることに彼のどうしようもない易さを感じ、いまさらのように Thiên を傷つけることができるのか疑われ、見開いた目が彼の惨めな格好を見るたびに、少し遅れて再確認する。Au にしてやるように腰を使う。まるで女のような Au は自分で腰さえ振らずに、すぐに射精してしまう。輪ゴムで根元を縛って留めてやったら、屈辱をあらわに顔に曝して、そして Trang は声を立てずに笑った。Thanh はいつも寝た振りをする。ベッドルームの暗闇の中で、天井にいつか誰かに張られた蛍光塗料の星のステッカーの群れが無意味な星座をかたちづくり、夜、Trang はいつも声を立てずに笑う。脅迫された Thiên は最早無抵抗に、股を広げた。垂れたままのぶよぶよしたそれを手のひらでもてあそび、息遣いさえ押し殺した Thiên の混乱を哀れんだ。口に含んで下で転がせばそれはすぐに勃起した。そのた易さにあぐけにされた。Mý が唇に押し付けた彼女のそれに舌を、それ以前に、唇が触れるのさえ拒否しようとされたときに、Mý はまるで自分が穢れきっていると宣告されたような気がして、Thiên に対する暴力的な衝動に駆られた。いま、口に唾えた彼のそれを噛みきったら、彼は泣き叫ぶだろうか？尻の下にした Thiên の顔に自分のそれを擦り付けるように叩きつけながら、いま、彼がどんな匂いを嗅いでいるのかは、予測がついた。Trang のそれと同じ匂いと、同じ味覚が、彼に感じられているはずだった。日本人に強姦された、と言ったとき、Mý は Trang をひっぱたいた。Trang が最早自分たちのとの関係を断ち切るうとしていたことを Mý は知っていた。Trang は言った。彼は私をひっぱたいて、抱きしめたのだ、と。Mý は Trang の髪の毛をつかんで壁に居投げつけ、背中を打った Trang は息を詰めるが、彼は私を自分の部屋に連れ込んで、服を脱がしてしまったのだ、と。Mý の振り下ろされたこぶしが Trang の後頭部を強打して、気を遠のかせた Trang が一瞬白目を剥いたのを齧く Mý は見いだし、彼は泣き叫ぶ私を四つんばいにさせて、つかまれた頭が Mý によって壁にぶつけられ、彼は私を何度も強姦したのだ、と。鼻血を流しながらベッドに倒れこんで、しわになったアオヤイ [áo dài] の匂いを嗅いだ。薄汚れた匂いがした。Trang を強姦した男のせいかも知れず、彼女がもともと薄穢れた穢い存在に過ぎないからかも知れなかった。乱れたベッドの上で、半ば失神して、寝乱れたような息を立てる Trang を殺してやりたいと思った。それは今ではなかった。いつか必ず殺してしまうに違いない気がしたが、Trang は恍惚としたものだった。やっと自分のほしかったものを手にした実感があつた。部屋の中で日本人の服を脱がして、自分はまだ純白のアオヤイを着たままに、ひざまづいて、窓越しの斜めの陽光に差された産毛に唇を触れた。匂いを、わざと音を立てて嗅ぎ、彼に自分が匂っていることを伝えた。何の意味があるわけでもなかったが、彼は Trang を立てているのを知っているべきだった。彼の名前さえまだ知らないままに、Trang は彼を愛していたし、彼は彼女を辱めてはならなかった。なぜなら彼女は彼を愛しているのだから。愛すると言う感情が、或いは、その行為としての意味がいったいなんだったのかわからなかったが、自分が彼を愛していることは、何かの破綻を感じさせるほどの鮮明さで温度さえ伴って、はっきりと認識された。のぼした腕が彼の体に密着し、指先が彼の小さく硬い乳首に触れた。見上げた鼻先の彼のそれに舌で触れ、自分の吐いた息もそれに触れたに違いなかった。ほしいのはこんなものではなかったが、目の前にあるのはそれでしかなかった。鼻でもてあそぶように撫でて、目の前で勃起したその先端に唇を触れた。舌で触れれば、Mý や Au のそれと同じような味がするに違いない事に知っていた。あなたはお父さんです。Mý が

Thiên に言ったとき、そうだ、それでいいんだ、と、いつまでそう思っていていいんだ。振り向いた Thiên の眼が未だにそう言っているの、あなたはお父さんです。Mý はもう一度繰り返した。もうすぐテト前の雨季がやってくる頃に、死者の記念日のために墓に出掛けた。Thiên は

もう一度言われて、同じ嘘をふたたび言い聞かせるみじめな、卑怯臭い表情に顔を持ち崩した後で、ふと、あらためて何か気付いたような顔をして、そして Mý は振り返るしかない。山際に切り開かれた墓地は向こうまで広大な敷地を墓石でうずめ、朝の空が頭上に輝いているはずだったが、それさえ Thien は忘れた。茂った草と樹木の匂いがした。墓の尽きたところに樹木の緑がうずめ、墓石はななめの光を反射した。線香に火をつけ終わった Trang が彼女を振り向き見、Mý は彼女の眼差しには気付かない振りをした。背中を向けたままの沈黙の、そしてややあって不意に逃げ出した Thien の後を Mý が追う。林に入って、樹木の狭間を走るが、本気で逃げている気がしない。Thienは逃げきってしまうことが怖かった。背後から飛びついた Mý に殴打され、口の中を切りながら、彼女の暴力を許した。



Trang は何故彼女がそんな事をするのか理解もできず、彼女が何をしようとしていたのかさえわからなかったが、そのまま取り残されて立ち尽くし、樹木の匂いを嗅いだ。広大な墓地に人気は無かった。はるか向こうの山の傾斜地に、墓参りらしい何人かの人影だけは動いていた。Trang は思い出す。土砂降りの雨が降った。十歳にならない頃だった。学校の校舎から、門を通り抜けて、バイクで迎えに来た Duy ユイ のところまでいかなければならなかった。雨具は家に忘れてきた。みんな雨具に身を包んで走った。彼らの無数の合羽の色彩が雨の中に揺れた。触れえるものすべてを濡らし尽くした雨の臭気が、重なり合って空間を満たした。雨が触れる前に、その下を疾走すれば、雨に触れないで済む気がした。それは明らかに正しく思えた。なにものにも触れられない速度だけが必要だった。Duy はもう待っているはずだった。壁に打ち付けた雨が撥ねて水滴が細やかに舞った。Trang が走り出した瞬間に、一瞬の猶予さえなく雨が体中を濡らしたのが、彼女の屈辱だった。泣き喚きながら父を探し、探し出された父の茫然とした顔を見上げさせずに、Trang は泣きじゃくり続けたが、視界がいま白濁しているのは知っている。帰ろう、と言った Mý を振り返りみた。どうしたの？ 問いかけた Trang に見向きもしないまま、一瞬黙り込んだ後で、唐突に彼女を後ろから抱きしめて、Mý が自分の匂いを強く嗅ぐのを、Trang は拒否しようとさえした。朝の空気の中に、夜の湿気がまだ残っていた。髪の毛の匂いがした。自分のもののそれなのか、彼女のそれなのか、判断できないまま、Mý の眼は開いたままだった。Thiên を強姦したことを告げた Mý の言葉に Trang はその意味を探そうとしたが、耳に何度か彼女の言葉をよみがえらせながら、意味が了解された時、もはその正確な言表は忘れ去られた。ただ、Trang は Mý が実父を強姦したことを知った。彼女の腕を振りほどいて、Trang はいまだ帰ってこない父を林の中に探そうとしたが、見ないで、という Mý の眼差しを拒否することができずに、立ち尽くした。振り向いた視線の中で、Không sao 大丈夫だよ、彼女は微笑さえして笑っていた。何も問題ないから、と、言う彼女の声を聞く。Trang は自分の息遣う声を聞く。Trang が運転するバイクの後ろで、わざと Trang にしがみついてやりながら、Mý は、いま、と思った、わたしが体を激しく揺らして Trang ごとバイクを転倒させてしまえば、私たちは死んでしまえるのだった。その事実が Mý をぞっとさせ、彼女は口の中のあふれた唾液を感じた。八歳のとき、何に気に食わなかったのか忘れてしまったが、ふてくされた Trang を訝った Hà が、一瞬、思いあぐねた拳句に、さけぶように誰に聞いたんですか？ 言った。誰に？ 彼女は、誰が言ったんですか？ 気がふれたに違いないと Trang は思い、気違いの母親との共生の未来の長い時間に恐怖した。取り乱した Hà は Trang が何か言おうとするたびに、その言葉そのものを取り消してしまうおうとするかのように、誰が？ 誰に？ 彼女は繰り返し、誰？ Trang は思った、言いなさい、と命じられながらも口を聞くことを拒否された理不尽さから逃げ出すすべを捜し乍ら、彼女をつかんだ腕の中で Trang が泣き叫んでいたことに Hà が気付いたとき、Trang は最早彼女を憎んでいた。他人を憎しむという感情のあまりの鮮明さを初めて知った気がした。どんな感情よりも際立って鮮明なそれが、骨の中に実体として覚醒していた。Hà は自分の感情の混乱そのものさえ怯えながら、泣きじゃくる Trang を腕に抱いて、Trang は彼女に謝り続けながら、この子は本当に知ってしまったのかも知れないと思った。Trang は Hà がその日 Duy にも相談したのを気付いていていた。双子に違いない、と Trang は思っていた。褐色と白と、肌の色さえ除けばどこから見てもそっくりな Trang と Mý は、いつかの昔に引き裂かれてしまった双子に違いなかった。小さい頃から戯れるように共有されていた確信は、Trang にある瞬間ふたたび確信された。それは強烈で、あざやかな確信だった。Trang は Mý の股を開かせ、浴室に高い天井の通風孔から光が差した。十一歳のとき、黒猫がバイクにひかれて路上に死にかけた。腹が裂けていた。もう助からないはずだった。雨が降っていた。その雨の水滴の匂いさえ記憶されている気がしたが、Trang は走って逃げた。どうしたの？ 問いかけた Hà の声さえ無視した。すべてを無かったことにしようとした。あの痛々しさを秘密にしていまいたかった。聞きもしなかった猫の鳴き声が忘れられずに耳に木魂す気がした。夜十時を回っても眠れなかった Trang は起き上がって、夜の空間に徘徊する。彼女は路上、猫の死骸があるべきはずのところに、最早その痕跡さえないことに気付く。それは不在だった。ありえないことに他ならないと思い、不意に Trang は自分が Mý と双子であることを、何度目かに確信した。それは屈辱さえ感じさせられるほどあざやかな確信だった。あまりのあざやかさが、自分が最早空っぽになってしまった気さえさせた。どうしてもあの Thiên と Tuyêt が両親であると言う確信が獲られないままに、確かに、彼らは Mý とさえどこも似ていなかったが、双子です。耳打ちする Trang に、え？ 言って、私たちは双子です。Trang は言った。Mý は首をかしげたままだった。それは二人にすでに確信されている事実だった。同時に、Mý にとって、それは現実的なあざやかさをそのものを欠いていた。Mý の体が男を知っていることは知っていた。昨日彼女がそれを言ったのだから。股を開いた Mý が恥らうようにそこを指先で隠したが、Trang は彼女の陰毛にかみそりを当てた。Trang はかみそりの先に剃られた毛の手触りを感じたが、まだ赤く染まった海を見たことが無かった頃、それは十二歳の同じ年だった。死者の命日のパーティが終わった後で、母親たち女たちは後片付けに追われた

。太った彼女たちの尻がキッチンの椅子に座り込んだMýの目の前で揺れ動き、窓越しの逆光がまぶたに触れた瞬間に、お母さん、Mýは言った。私は私？なに？忙しさの中で聞こうともしないTuyêtは耳をだけ傾けて、叔母のHạnhハンが向こうで声を立てて笑っていた。話し声が束なっていて、私は双子ですか？TuyêtはMýの言葉を振り向いて聞き返し、双子なんですか？その言葉を誰もが聞いていた。誰もが知っていたに違いなかった。無言の目配せがすべてを明示した。誰も何も言おうとしなかった。その瞬間に何の根拠も無く、彼らとは何の関係も無いと確信した。本当の母親と父親は別に居なければならなかった。彼らは完璧な他人に他ならないのだから。捨てられる恐怖と、彼らが自分たちを捨てることなどありえない軽蔑じみた安堵とが半々に交錯していた。自分が股を開く番だった。開いた股を隠しもせず、Mýに突き出して、浴室を満たした穏やかな自然光を浴びた。全裸の二人の女の体臭がするはずだった。TrangにはMýのそれしか感じられなかった。裏切り者のMýの穢らしい体臭。Âuに穢され、彼を穢しさえしてしまった体の匂いが鼻にあった。彼女の指がTrangのそこに触れて、陰毛を撫ぜ、何かを確認する。その形態をなのか、手触りをなのか。Mý自身にさえ、自分が何を確認したのかわからなかったが、まるで女のように。自分の体の下で、Âuはまるで女のように一方的に気持ちよくなって、すぐに射精してしまった。頭を撫ぜてやるMýに甘え、甘えた後で思いなおした。Âuは拒絶した。腕枕にMýの頭をとって、彼がいったいの男になった気で居るのをMýは滑稽に思い、彼は抱いたのではなかった。彼は抱かれたのだった。彼はGái[少女]だった。男ではなかった。かみそりの刃が皮膚に触れた触感に、Trangが悲鳴を上げたように目を閉じた瞬間に、痛いですか？Trangは耳元でささやかれたMýの声を聞く。開かれた眼が両方そろってMýを捉え、首を振り、言う。違う。痛くない。Mýは笑っていなかった。慰めるような眼差しがあった。それが意外だった。大声で、嘲笑われる気がしていた。目の前のMýの唇に、唇で触れた。なんだか戯れに口付けた唇だった。感触に記憶があった。かみそりを当てたままの指先は停滞し、Trangの指先はMýの体の形態を確認するように撫ぜた。MýがTrangを見ていた。Trangも自分を見ていたことをMýは知っていた。Trangの指が自分のそこに触れた瞬間に、もはや、拒絶するタイミングは逃がされた気がした。彼女に体を与える以外にできることはなにもない気がした。Trangの指先がその襞と粘膜を撫ぜながら、その不器用さはやがてそこを押し開き、一本の指が中まで入ったとき、入った、と思った。ひとつの実感として。自分の身体の中に、Trangの指が明らかに存在していた。見詰められた視線の先で、Trangが不意にMýをひっぱたいたとき、Mýは犠牲者の顔を曝して、そのか弱く激しく自分を咎めている眼差しを、Trangは惜しみなく憎んだ。Trangのこぶしが何度も彼女を殴打し、犬のように尻を向けさせて、ようやく手はノズルをつかんで屈辱的な姿勢を維持した。Mýは息を詰めながら体内をかき混ぜるTrangの暴力的な愛撫を感じ、引き裂かれそうな痛みにも苛まれる。彼女のそこは血にまみれているに違いなかった。それは比喩とは思えなかった。Trangに壊されてしまった、と、彼女を許した自分の哀れみを後悔し、反吐が出そうだと、Trangは思う。目の前で、穢らしい女の尻がひくつきながらうごめいて、指が彼女の体液で濡れていた。犬のように、屈辱的なまでに穢らしい。垂れた乳房がぶら下がって、お互いにぶつかる。コックをひねって、熱すぎる湯を彼女に浴びせる。鼻から水を飲んで咳き込んだMýを羽交い絞めにして抱きしめ、口付け、むさぼって、彼女の指を自分のそれにあてる。彼女の指が一瞬拒否したのを、軽蔑として理解した。憎んでいるのか、愛しているのか、求めているのかわからなかったが、彼女の指が自分の体内に入ったことを確認したとき、彼女の体内に自分の指を濡らしながら、憎んでさえいない、と思った。赤い海は美しかったのか、そうではなかったのか、Trangにはわからなかった。美しいと言っては大人に怒られる気がして口をつぐんだ。あざやかだったのだけは事実だった。Mýの眼差しの向こうに日に照らされたコンクリート舗装があった。海辺の町の舞い上げられた砂が白く穢して日は砂をまでは灼かなかった。植物の色彩も、例えばTrangの肌がそうであるように太陽光が着色したものにすぎないことは知っていた。緑の、或いは樹肌のベージュ、そして彼女の褐色、触れるものすべてを太陽光はそれぞれの可能な色彩を掘り起こして着色さしめた。Trangの褐色の色彩に、自分の純白の色彩との差異は見かけのものにすぎなかったが、明らかに違った。彼女は無防備なTrangの惨めな褐色を哀れみながら愛した。TrangとMýは時にひそひそ声で話した。二人以外の誰にも聞かれないように、そして誰もが二人の話に耳を澄ましてさえ入るのはよく知っていた。TuyêtもHàもThiênもDuyも、それ以外の親族の者たちも彼女たちをひそかな気遣いの眼差しの中に捕らえたが、その優しく無言の眼差しには明らかに警戒の色があった。いつか自分たちが、何もしないままに凶暴な何かになってしまったのを、Mýは嘲笑いに近い微笑の中に捉え、確かに、いつか彼らを自分たちは食い殺してしまうかも知れなかった。Trangが捕獲した鼠を口から啜えた家の猫を追い回すのを、その上げられた大袈裟な悲鳴を聞きながら、それは自分たちの生まれ変わりなのかも知れない妄想に取り付かれそうになっている自分を笑った。輪廻の先には野を駆ける猫の未来が待っていたかも知れず、あるいは眼の前のそれは過去の現実かも知れなかった。Âuは彼女の体を盛りがついたように求め、Thanhは毎晩眠った振りをしたが、彼もまた自分の体を求めているかも知れなかった。目に付くものすべてが、結局は自分を求めている気がした。目の前のTrangは斜めにさす陽光の中で美しく、スマホをいじる手を指ではじいてみるとなじってみせたが、Âuは自分のほうをより美しく感じたのかも知れ



なかった。Trang の尻を追いかけ、そのたびになじられ拒絶される Âu は。学校から帰ってきた Âu が部屋にこもってスマホをいじっているのを知っていた。Tuyêt が店で近所の女たちと話しこんでいた。Trang が飽きているのは知っていた。不意に Trang のスマホを奪って、逃げ出した Mỹ を Trang は追った。背後で Tuyêt の咎める声を聞いた。キッチンに逃げ込んで、フライパンを盾にした。窓越しの陽光が乱れた Trang の髪の毛を照らすのを見た。白い反射光豊かな髪の毛にうねって、散った。声を立てて笑われていた。空間に自分たちのその声があった。階段を上がって、Âu の部屋に侵入した。Âu の、何が起こったのか確認しようとする怯えた家畜のような目つきを見た。放し飼われた牛の眼差しに似ていた。いつでも不機嫌な Trang が笑っているのを不思議なものを見る眼差しの中に、Âu は捕らえていた。放り投げられたスマホが Âu の胸に撥ね、大袈裟な痛い、という彼の声を二人は聞いた。手をのばした Trang をうしろから押して、二人で彼の上に倒れこみ、その身体に触れた。Trang が何を求めているのかは知っていた。Âu は Trang を愛していたには違いなかった。彼が夢に見たかも知れないように、彼女の乳房を後ろから両手につかんだ。わざとらしい声を立てたが、Trang の眼差しが寧ろ Âu を捕らえていたのは知っていた。T シャツをめくって、彼女の豊かな上半身を見せたとき、Âu の眼差しがそれを見詰めて離さなかったときに、Mỹ は彼の裏切りを感じた。仰向けにして羽交い絞めにした Trang の体がどうなっているのか、Mỹ は彼に教えた。彼女の体のことは Mỹ が一番よく知っていた。華奢な身体に、乳房だけが豊かに垂れ下がって、黒い乳首が二つ目覚めて固まる。彼女が何を求めているのかも知っている。肉体が、精神が、あるいは、それらが一緒くたになった穢らしく惨めな塊りが。Âu に姦される Trang の息遣う首を軽く絞めた。Trang は Âu の女ではないつもりだった。自分は誰のものでもないとしぐさに表し続け、時に彼に尻をひっぱたかれても軽蔑的な眼差しをくれるだけだったが、Trang は完全に Âu のものにすぎないことを Mỹ は知っていた。カフェや、家屋の中で、家族の人々の眼差しの中で、未だ誰も自分たちのふしだらかも知れない関係に気付いていないことを不審に思った。彼らの眼にはつかなかった。ひそひそ声の双子の密談にばかり気を取られた彼らの家畜のような怯えた眼差しは、Trang にとって哀れな節穴にすぎなかった。ふしだらとはいえなかった。ふしだらと言うなら、植物の花弁の色彩も、哺乳類の鳴き声もすべてふしだらなものにすぎなかったが、Âu は時に、自分の体の上で腰を振って、自分の体を愛撫する彼女たちを、病んだ、それ以外に能のない奇形的な人間のような気がした。彼女たちは明らかに何かを欠損させていた。彼が見ている風景をなど、彼女のうちの独りさえ、一瞬さえ見だしはしない、そんな時間が合ったが、見詰められるのは高い窓越しの陽光が彼女たちの褐色と白の上に乗った複雑な影のグラデーションのざわめきにすぎなかった。嫌悪すべき風景だった。Mỹ が昼寝したうちに、彼女に秘密で息をひそめながら彼の上にまたがって、その性器を指先で撫ぜた Trang の卑怯な眼差しを見詰めた。開かれた彼女の唇が次に何をするのかは知っていた。頭のおかしく、聡明なけだものたち。彼女のうわさをみんなしていた。彼女たちがすでに、すべてを知っていることに、彼らが恐怖さえしているのを彼は知っていた。Hà が二人を呼び出した。夜の、閉められたカフェの中だった。Tuyêt は夫とどこかに出掛けた。Thanh も、Âu も聞いていた。Duy は見詰めざるを獲無かったのは彼女たちのまなざしだった。二人の、顔の真ん中を占めた猫のそれのような大きすぎる眼は、パッチリと見開かれて、それぞれのかすかな黒目の震えまでもをつぶさに曝してしまい、にも拘らず、その、なにも語りかけない沈黙した黒目のきらめく黒さを見た。企むような、いつくしむような、無防備な、装った、警戒した、解放的な、彼女たちの表情のたたずまいの無数の暗示の真ん中で、黒目だけが完璧な沈黙を明示していた。その四つの黒い眼を交互に見返しながら、彼女が本当に自分の声を聞いているのかさえ Duy は疑った。その向こう側には何もない気がした。魂ひとつさえも何もなく、にも関わらず、その向こうに凄馬じい言葉の群れの饒舌の汨濫が木魂しあっていることは、知っていた。躊躇いがちな Hà が、やがては一気にまくし立てるように、彼女たち双子が乞食の女がダラット Đà Lạt 近くの高山の町で抱えていた子どもに他ならないこと、その当時子どもが居なかった Hà たち夫妻が譲り受けて帰ってきたこと、その乞食の女は間違いで、探しても意味が無いこと、ダナン市に帰ってきたとき、Tuyêt たちと分け合ったこと。なぜならその頃まだ彼女たちに子どもは居なくて、亡くなった前妻との間に生まれていた Âu はまだ、前妻の家族が引き取っていたままだったのだから、と、それらを一気にまくし立てる Hà はある瞬間に、その大きすぎる瞳いっぱいには不意にたまり始めた涙がこぼれようとしてこぼれ墮ちず、あ、と、危ないと思うまでも無い一瞬に流れ落ちた滂沱の涙が真っ白い肌を伝って濡れさせた Mỹ の、泣き顔が Hà を後悔させた。彼女たちに告げたことではなく、自分のすべて、自分たちのすべて、自分たちを含む世界のすべてを、彼女は後悔しなければならなかった。Trang のうつむいた眼は、閉じられていたのか開かれていたのかさえ、いま、彼女に覆いかぶさった豊かすぎる彼女の髪の毛が隠した。だが、と Hà は言うが、言われる前から誰もが何が言われるのか知っていた。にも関わらずあなたたちは私の娘だと言う彼女の言葉を追想するように誰もが聞き、その意味をそれぞれになぞるが、Âu に実母の記憶など最早なかった。明け方の空気が好きだった。朝誰よりも早く起きた。カフェのシャッターを空け、向こうに明るみ始めた夜の終わりの崩壊の鮮やかさを見出す。カラテを習っていた。ベトナム人の師範だった。近所の廃屋から拾った崩れたブロックを両手に包んで、Âu は型を演じた。引き伸ばされ、或いは収縮させられた筋肉が褐色の皮膚の下に明らかな筋を描き出し、次第に内側から

汗ばみ始める。不安定な廃屋の崩れた壁に爪先立って、ゆっくりと、自虐的な悲鳴を上げそうになるほどゆっくりと、ブロックをつかんだ両手を広げていく。夜は滅びようとしたまま、未だに滅びきれない惨めさを曝す。筋肉が震える。何も辛くも苦しくも無いのだが、筋肉は最早限界の境界線を行き来し始めている。夜の黒さは最早、死に切れない敗残者のむごたらしさに過ぎない。ある一瞬に、決壊した空が光の侵入を許したとき、ななめに差す光に肌を晒す。汗ばみ、殆ど静止した身体の中で、呼吸と筋肉だけが強烈に覚醒している。何も苦痛など与えられていない筋肉が、筋が、骨さえもが、絶望のこえをあげているのを知っている。精神、と呼ばれるべきもの。ともあれ、肉体とは差異するその実在が、肉体を支配していた。最早、肉体は死んでさえしているのではないか。発狂さえしているのではないか。凄馬じい拷問の残酷さを精神だけが、そして自虐的な喜悦の声を漏らし続ける。もっと、ゆっくり。時間が逆行するほどに。夕焼けじみた紅蓮の斑な色彩が空の一部を支配し、夜は滅びた。くらんだ青さが白ずみ乍ら浮かび上がり、ただ息遣うだけの沈黙の中で彼の精神と筋肉は絶望の絶叫を発し続けた。Trang の、耳元でささやく声を聞く。Anh yêu đi, いたずらのように彼の乳首をつまんで見せて、昼間の執拗な暑さが通風窓越しの光に在る。Anh yêu đi yêu thể nào ?, 彼女の髪の毛の匂いがう雑多いほどにAnh nào ?鼻を衝く。あなたは誰？どうしよう？彼女が言うのを、答えようの無い質問を選んで口走る彼女は、美しい女だった。扇情的な美しさがあった。どちらを愛しているのか、Âu には分からなかった。誰もが彼女たちの誰かと Âu が結婚することを予測していた記憶があった。まるで夫婦のようだと、押さない彼らを、誰かが評した。Mỹ が差し伸べた誘惑に彼は手を触れた。キングサイズのベッドルームに Thanh と三人で寝て、誰もがまだ子どもだと思っているすきに、彼はすでに十分男だったし、Mỹ が自分の女性性を無言のうちに主張していることも知っていた。壊すべき、壊し獲るものが容易に手のひらの上に載っていて、Âu が、自分にしがみついていた眠った Mỹ の身体を抱きしめて、よく知っていたその体温を彼の皮膚自体で感じたときに、手のひらの上の容易に壊し獲るもののあまりの容易さに戸惑った。なんの困難さも無かった。



抱きしめる Au の腕を、目覚めた Mý が振り払おうとするのを彼は拒絶し、逃がしてはならない。彼女が叫び声を上げるかも知れなかった。戯れに立てられた嘘の悲鳴が結局は彼女を追い詰めるに決まっていた。絡みつくような誘惑の眼差しで、Mý がすでに彼を拘束し続けていたのには気付いていた。Trang はすべてを壊してしまうに違いないと思った。彼と彼女が夫婦になったならば、捨てられた彼女は迷うことなくすべてを壊して仕舞おうとすることが確定されていることが、Au を怯えさせる。扇情的なだけでうそつきの Trang が、手をふれることを求めるばかりではなく、うそと共生しながら、のばされた手を軽蔑しなければ気がすまない病的な Trang のう雑多さを思い出す。T シャツを脱がせて上半身だけを裸に剥いたとき、Mý はた易く降伏する。次の日の朝父と母に彼女はベッドルームを分けることを主張した。キッチンの横のスペースでこれから私は一人だけで寝る。駄々をこねる彼女の狂態に、Au は彼女の選ばれた恍惚を感じた。すべてを彼女はやがて告白してしまうに違いなかった。むしろ、沈黙のうちにさえ、すべてを告白しようとしていた。まだ何も壊していない、壊しきらなければ、たぶん、なんにもはぐくむことなどできない。暗い夜の光の中に、浮かび上がった白い Mý の腹部に顔をつけて、匂いをかぐ。手を触れられても居ない彼女の両腕が、拘束されたようにその頭の上で組まれて、彼女が彼に身を曝しているのは知ってる。目を閉じているうちに、彼が自分の、彼が夢にまで見ていたのでなければならぬ美しい体を舐めるように凝視するのを彼女が求めているのを Au は知った。Trang が腕で目隠しをしたままに、手のひらが拘束した Mý の指が彼女の指を、そして時に手のひらをなぜ、もがくが、昼下がりの淡い光の中に、ベッドルームの湿気が彼女の皮膚を汗ばませた。脇の匂いを嗅ぎながら、彼女の脇の毛にかみそりを当てた。まるで子どものそれに返そうとするかのように、生えた腋毛を剃って、滑らかな肌に戻そうとする。しっとりとした汗ばんだ肌が、息遣うたびに吸気するので、手のひらで彼女の唇を塞いで見る。Au が彼女を抱いたことはすでに知っていた。Trang のほうが先に彼に抱かれるはずだった。彼が Trang を求めていることは誰もが知っていた。どこにでも彼のいじましい眼差しが、この家屋に打ち捨てられていた。Au が自分以外の女を愛することなどできないことを Trang は知っていた。Trang が美しく、誰もが彼女を求めてやまない羨望と争いの対象に他ならないことは、Au や、Đat ダット や、Lợi ロイ や、誰かが教えた。それらの無数の眼差しの意味を、何も触れないままに暴力的に彼女の両目を見開かせ、気付いた瞬間に、彼女は自分がそれまで何も知らなかったことを知った。自分の美しささえ。匂うような自分の美しさそれ自体に窒息しそうだった。自分を哀れんだ。鏡に映った美しい女を、埋葬してやる必要があった。悲劇そのものがそこに映っていた。なんにも救うことができなかった。せめて、誰よりも、何ものよりも美しく化粧し、色執ってやらなければ、あまりにも悲惨だった。Mý に触れてしまった Au の伏目勝ちに自分を避ける眼差しが、彼の敗北を明示した。Trang は彼に自分を与えるべきだったが、そのすべはなかった。瞬く。瞬きの連続の中に視界をつなぐ。光が与えた色彩の、それらの束なりが暗示した形態が、世界だと言うことには気付いている。見詰め、その只中にくちゃくちゃにつながりあって存在しながら、彼女はそれらを見ている。世界は私を生み出すために生まれたのだろうか？それとも、世界が私を見詰め獲るように、せめても哀れんだ私の優しさが世界を生んだのだろうか？自分の美しさの悲惨さにすでに自分が敗北したことを知る。何ものも救われようがない。母親に罵られながら、庭に生えた雑草に水をやる。無数の小さな花卉が蝶を舞わせた。妄想としていつか、まだ九つか十の時から Hà が自分の本当の母親ではないという思い込みを模手遊んだ。信じきられたそれが時に Trang に恐怖を与えさえし、Hà への媚びた従順さを強制した。彼女に棄てられてしまえば、一人で生きていくのは困難なはずだった。少なくとも十六歳くらいまでの猶予が必要だった。彼女の告白を聞きながら、泣きじゃくる Trang が寧ろすでに知っていた頃が事実だったことへの追認に、どうしようもなく梃子擗っていることさえ知らない歯痒さがいっそう彼女を泣かせた。塀裏の庭の一片を雑草が包み、水浸しになった周囲の土が蒸れて、蒸発する水の泥にまみれた臭気が鼻を打った。舞い上がった湿気が皮膚を押し上げるように足元から湧き上がって、Trang に激しい後悔を与えた。Au は父親に与えられたバイクに乗った。Uyên ウィンの見舞いに行った。十五歳の誕生日には未だ間があった。Mý も Trang もまだ彼の体を知らなかった。そればかりか、誰も。Khoa コアと待ち合わせて病院に行くと、その敷地に入った瞬間に気分が重くなった。Uyên はおそらくは助からないほうが幸せかもしれない。彼は二つ年上の友人だった。太って、眼がねをかけ、趣味のように外国語を勉強した。英語とフランス語が話せた。日本語と韓国語を勉強していた。死んだほうがいいと言ったのは Khoa だった。つい二日前に見舞いに行ったばかりだった。その時 Khoa が垣間見た彼の状態がひどかったことは昨日聞いた。まだ幼い頃にダラットから転居してきた Au にとって家族は多いわけではなく、彼はいまだほとんど死に、じかには触れたことが無かった。話す Khoa の話の内容を殆ど聞き取ることも無く見舞いに行こう、と Au は言った。Khoa が行きたがっていないことは承知していた。一人で行く気にはなれなかった。交通事故にあった Uyên が助かるかどうか医者さえ分からなかった。集中治療室のでたらめにぶら下げられたチューブと点滴と呼吸器がその身体の生命活動をかりうじて維持していた。右腕はどこか



へ千切れて仕舞った。残骸はあったが、大型トラックに踏み潰されたそれはアスファルトを汚した有機体の塊り以上のものとしては残存しなかった。頭蓋骨が陥没して、脳の損傷の程度はまだはっきりと分からなかった。顎が砕けて、そこに、それは痕跡としてさえ存在しできなかった。数え切れない内臓疾患と内出血で、非常に困難な状況をぐるぐる巻きの包帯が縛り付けていた。生き残るとは思えない、と Khoa は言い、いずれにせよ、彼らの友人だったあの Uyên があのままに帰ってくる事はありません。何か違った、彼らの知らない Uyên が生まれようとしていた。病室の中までには入れなかった。うめき声が聞こえた。Khoa が茫然とした表情をした。それは Khoa がまだ知らない風景だった。意識も無く沈黙したまま真っ白い包帯だらけの Uyên は、そこに居なかった。隔離されたついでに向こうで、Uyên に違いない男が喉からうめき声のような低い音声を立て続けていた。それを、まるで穢らしい地獄の世界から洩れてきた音のように錯覚した一瞬の後、それはただの音だ、と Âu は気付いた。Âu は声と音との違いをはっきりと自覚した。それは肉体が立てた音ではあっても声ではない。Khoa が恐怖さえしているのは知っていた。彼の表情は固まったまま、心が折れたような無表情さを曝した。Âu は目を細めた。衝立の向こうから出てきた Uyên の父親が、微笑むことも無く彼らの手を交互に握手に取った。母親は衝立の向こうから出てこなかった。前よりひどくなった、と Khoa は病院を出たときに言った。前は白い包帯の覆わない一部から覗いた Uyên の、日に灼けた黒さとは明らかに違う土色の皮膚が Khoa に、自分自身とのどうしようもない差異を突きつけた。うめき声は無かった。生まれてきたことそのものを後悔していた。Uyên は叫ぶことできないままに、はやく、今すぐ楽にしてくれと泣いていた。その声の凄絶さが、Khoa の胸を締め付けた。一ヵ月後になって、やっと Uyên は死んだ。口籠った Khoa が電話越しに、死んだよ、と言ったとき、Âu は耳を疑った。ベッドの上で通風窓から差し込む日差しを見やり、誰が？彼は思った。何が？どうして？いつ？いくつもの疑問符だけが明滅し、何も言わない口籠った Khoa の鼻を近付けすぎた息遣いのノイズの無効に、Uyên のあの音声を想起した。Uyên？と言ったとき、それでもないも答えない向こう側の沈黙に、Âu は Uyên のために少しでも祈ってやらなければならない気がしたが、Trang は彼のそれから顔を離して、自分のそこに押し込もうとする。Âu は身をもがくようにして、彼の体の上で腰を揺らしている Trang の体を支えてやり、なかなか入らないそれに Trang は苦戦した。手を添え、身をよじり、尻を浮かせ、Uyên がいつ死んだのか知りたかった。大型トラックと正面衝突した瞬間に死んでしまっていたのか、次第に命は削られながら Âu があったときにはすでに死んでいたのか、それとも、あれから一度も見舞わなかった日数の、どこかの瞬間に彼が死に触れて消滅した一瞬があったのか、それとも、生命維持装置が外された瞬間に、本当に、単純に死んでしまっただけなのか。彼の横ですがりつくようにして眠っている Mỹ に話したとき、彼女は耳を塞いだ。Trang は Uyên の存在さえ知らない。何から教えるべきなのか、気が遠くなる気がした。一緒に上った山の小川の水の流れのきらめきか。それを一瞬にして澱ませる近所の飲料水工場の排水の暴力的な濁硫か。授業中の居眠りか、居眠りする Uyên の頭の向こうに見た樹木の葉々の逆光の煌きか。悪いことなど何一つしなかった。雪崩落ちて鼻先をくすぐる Trang の髪の毛の匂いを嗅ぐ。Thanh はカフェでスマホのゲームをしてるに違いない。Trang に彼らが本当の両親ではないことを悟らせたのは彼の知性の欠如だった。彼らは何も知らなかった。彼女が知っている、この世界の美しさも、悲惨さも、絶望的な卑小さも無慈悲な永遠の大きさも、何も知らない彼らが彼女をなど生み獲るわけが無かった。彼らに育てられながら、彼らの卑劣な愚劣さを笑い、いつくしんだ。彼らは、彼女に愛されることだけを求めていた。学校が終わっても家に帰る気がしなかった Âu はいつだったかバイクで海辺を走った。Uyên はまだ生きていた。学校で彼とじゃれあって別れ、Uyên は塾に急いだ。海辺の外国人観光客用のカフェに Ngoc ゴック たちがいることは知っていた。その、外壁のすべてが嫌味なほどに白いカフェにバイクを止めて Ngoc たちを探した。貧しく学校にも通わずに建築の仕事をしている Ngoc は車の免許を取ろうとしていた。観光都市だったから、大型免許があればそれなりの給与にありつけた。十八歳の Ngoc は彼の兄貴分だったが、家族の誰からも厭われた。外国人たちのように頭の良くない女たちをはべらして、Ngoc はいつも Âu にビールを飲ませた。手を振る Ngoc に笑いかけながら手を振り返す前に Âu は視界の端に映った、店前の地面にしゃがんで煙草をふかしている男の猫背に目を留めた。それは一瞬彼を不快にしたが、Âu は久しぶりに会った Ngoc が差し出した煙草を啜えて、吸った。Hiên ヒエン という名前だった。猫背の男は、煙草を投げ捨ててもみ消し、奥に入ろうとした hiên を、Âu は呼び止めた。目線があった一瞬のあと、お互いに、交わった視線を後悔しながら、無意味な戸惑いとためらいを嘔み潰そうとした。Hiên が名前を聞いた。Âu は自分の名前を答えた。刺青だらけの Ngoc の左腕が饒舌なジェスチャーを繰り返しながら、彼の隣の女は聞きもせずスマホをいじった。Ngoc の笑い声を聞いた。背後に、奥に入って行く男を Âu は見向きもしなかった。Ngoc のつれていた女はダナンに一人で住んで居た。旅行会社の事務員をしているといった。Ngoc の話し相手になってやる律儀な Âu に、不意に眼を上げ、目が合った瞬間に微笑みかけたが、何も言わないままに眼を逸らし、それから二度と彼に目線を交わらせることは無かった。Uyên の葬儀に日に、その女も来た。親戚だったのかも知れなかった。Hiêu ヒュー という彼女の名前はあの時に知った。老婆が彼女をそう呼んでいたのを、一瞬耳にした。不埒さを押し隠して、彼女は従順にテーブルの端に座って、何をするでもなく時間を潰していた。太鼓

と銅鑼が鳴った。Uyênの家の庭を押し茂ったつたの葉が日陰に覆い隠し、歩道に留められた無数のバイクがその向こうで朝の日にさされていた。Âu のよく知っている幼い妹の Hào ハオ が、彼の名前の知らない男の子を追いかけて転んだ。彼には見向きもしなかった。両親は沈黙したまま、悲しげな風をさえ見せなかった。悲しまれるべき時間はすでに消費され尽くしていたのかも知れなかった。来るのが遅かった気がした。なにもかも手遅れだった。泣き叫んでいたのは三十代の大柄な男だった。Dung ユン が、あの男が Uyên を轢き殺したんだと Âu に告げた

。Âu とDung は庭のテーブルに座って、Âu はテーブルの上に用意された水を飲んだ。どうしようもなく喉が渴いていた。Dung に勧めると、それが礼儀にかなわない行為であるかのような咎目立てる眼差しに拒否され、Âu は自分の子どもらしさを恥じた。Uyên を轢いた男はまさに彼が悲劇の中心に居るように泣き叫び続け、Âu の隣の男は地面に鼻をかんだ。目線があったとき、彼は

Âu とDung を交互に見て笑い、何歳だ？彼が言うのを、一瞬、場違いな言葉に思った。60歳近い男だった。遅れて Trang の Mỹ をうしろに乗せたバイクがついて、振り向いて彼は手を振った。Trang のバイクの音を覚えていることに気付いた。よく葬儀の場所に似合うことが意外だった。双子のような、と、誰もがうわさした双子の姉妹は、美しく、清楚に、棺の周囲を彩った純白の花々のように、訣別のただ純粋な悲しみをだけ披露した。やめたほうがいい、と一瞬思ったときには、二人は奥の、Uyên の棺に覗き込んでいた。言葉を失った表情を曝して、ややあって、付き添っていた Uyên の母に両脇からしがみついて、彼女に言葉を重ねた。何を言っているのかは聞き取れなかった。不意に Mỹ の背後の今日は暗くふけて見える Uyên の父親が泣き出し、嗚咽の声さえ聞こえた。泣きじゃくった Trang と Mỹ にもみくちやにされながら、Uyên の母親は彼女たちの頭を撫でてやり、どうだった？と言った Âu に、綺麗だった、と Mỹ は答えた。二人の少女を、Khoa と Âu はテーブルを囲み、Khoa に Uyên の死に顔を見る勇気は無かった。Khoa は

まるで彼女たちを誘惑しようとするかのように、水を汲んでやって、奉仕した。繊細な男だった。神経質に、伏目がちな眉を常に上下させた。死に顔くらい見ればよかったと Âu は思った。テーブルの上にしかれた白いシーツを葉々から漏れ出した光が斑に差す。Trang が日本人を連れ込んだことは知っている。日本人がいない平日の昼間に、時に昼寝する Âu と Mỹ の間に滑り込み、寝た振りをした Âu に気まぐれな愛撫をくれる。時には彼女を抱いてやりながら、確かにあの日本人は美しかった。長い名前のために、誰にも本名を覚えきれずに、単純に縮めて Ma とだけ呼ばれる彼の美しさが日本人と言う人種の美しさを証明するわけではないが、ベトナム人の美しさには無い特異な美しさであるのは事実だった。人種的な差異を感じさせられ、それは、屈辱的な体験ではあった。と同時に、日本人にも美しさが存在することに驚いた。町でたまに見かける日本人たちは、誰もが老いさらばえていて、力なく、うなだれているばかりだった。薄っぺらい存在感に必死に威厳を作ろうとする無理が透けて見えた。いずれにしても、それは、老人たちの国に違いなかった。Trang が不幸になるのは目に見えていた。あの男が Trang をなど永遠に愛するわけがなく、日本に Trang の居場所などありえない気がした。わがままな Trang が Mỹ が彼に求めた愛撫を横取りするように彼の唇を奪って、体を摺り寄せる。Âu はすべてを知っていた

。Uyên という少年が存在していたことなど最早誰もが忘れてしまっていたに違いに数ヵ月後に、夏の日差しが彼の肌にじかに触れる。バイクを走らせる。風景が視界の中で速度を持つ。行き違う風が光の直射から火照りを奪って、温度だけを皮膚に刻む。Ngoc といつか会った海沿いのカフェに行った。あの男はまだそこに居る予感があった。バイクを止めて、中に入ると、大学生たちと、その対角線上に韓国人たちがたむろしていた。目の前を白人の夫婦が通り過ぎた、何を言っているのかはわからなかったが、それがフランス語だということは分かった。奥の日の当たらない席に座って、人を呼ぶと、自分よりは年上だが若いには違いない女が注文をとった。その男の名前はまだ知らなかった。時間を潰し、何度か目にバイクの音に顔を上げたとき、その男が帰ってきたのを見つけた。前より若くなった気がした。気のせいかも知れなかった。奥の誰かに笑いかけながら通り過ぎようとする男を呼び止めた。男は自分のことなど覚えてさえ居なかった。あるいは、あの日、自分が彼と会ったようには、彼とは会わなかったのかも知れなかった。一度奥に入って買い物袋を渡し、戻ってきた彼に妹たちの写真を見せた。綺麗だね、と言い、双子か、と尋ね、お前の恋人か、とからかった。目の前の向かいに座っている男の顔を見ながら、どうして彼は、あるいはこの場に居て自分たちを視界に納めたはずの人々は気付かないのか訝った

。Trang は Mỹ に似ているが Thiên にも Tuyêt にも似ていない。Âu は Hiên には似ているが Hà にも Thiên にも Tuyêt にも Duy にも似ていない。Trang は Âu に似ていて、Âu は Mỹ に似ている。スマホを手繰って両親たちの写真を見せたとき、やっと Hiên は彼の言いたいことを了解した。Âu を見詰め、お前の両親か？尋ねた彼に、Âu は教えてください、と言った。すべてを教えてください、といい、彼がそれでも嘘をつくなら、本当のことを全て Âu 自身が彼に教えてやるつもりだった。まだ Hiên に何も告白されていない彼はまだ何も知らなかったが、すでに Âu はすべて知っていた。貧しく、能無しの Hiên は親戚を頼って、その経営しているカフェに住み込んで面倒をみさせていた。Hiên は懐かしそうな顔さえ見せずに Âu を見詰めた。声を立てながら Trang が Mỹ をからかう。つかんだ自分の髪の毛の先で Mỹ の鼻先をくすぐり、まじめ腐った Mỹ の表情を嘲笑う。Uyên の葬儀のとき、花々が埋め尽くして見えなくなった Uyên の死体を棺のガラスごしに覗き込んだときに、神々は結局なにものをも救いはしない実感が、彼女の背

筋に素手で触れた。確かにそうに違いない。何もかにもが救われ獲るなら、この世界が存在する意味など無かった。世界が存在すると言うことは、何も救われ獲ず、何も救われたことなど無かったということだ。花を育てることが好きだった Trang は庭のいたるところを花で埋め尽くした。蝶と虫が舞い、水をまくたびに湿気が低い空間をたゆたった。猫が庭を疾走して、立ち止まって耳を澄ます。しっぽが空間を撫でて、何かを、その体内の中に律動させていた。





Trang が墓地から持ち帰った紫色の花を庭に巻いたとき、Duy も Hà も嫌がった。Trang はそれで庭中を埋め尽くしてみたかった。くねった細くしなやかながらに強靱な細い茎が縦横に空間を走り、腰の高さにまでも違って、ぎざぎざの、決して美しくは無い、確かにある種の野生のまがまがしさを感じさせる葉が生い茂る。その間に草がはやした男性器のような長い突起がいびつにくねりながらのびて、その突起に段々と小さな紫色のはかない花が一つか二つだけ咲く。それらは束なって、空間に緑と紫を無数に点在させる。美しくは無かったが、はかなく、にも拘らず強靱さを湛え、いびつなまがまがしさが空間の中に異物化し、結局のところ、その色彩は綺麗だった。その感性を受け居られなかったとしても、なんの後悔もない難解さがあったが、それは眼差しに触れるだけで、誰も説くべき必要もなく、単純に素朴な野生の花が咲いているに過ぎない。裏道の、コンクリート舗装されただけの粗い路面に日が当たる。砂交じりの白い土くれがその上を斑に汚して、それらに色彩を与えているその根拠に他ならないはずの光の直射した焦点に、色彩は消滅して白濁した閃光に過ぎない。光には匂いがある気がする。まだらに灼けた干し草のような粗雑な匂いが、かすかに。Âuに呼び出された Trang が、彼らの家の前を通り過ぎると、Trang は中に、数人のいつも見かける客がたむろしていて、カード賭博に興じているのを確認する。奥で、Âu は確かに彼女の姿をその眼差しに捉えた。Âu に目線さえ投げかけない Trang は、白目と黒目の境目に彼の姿の気配を捕らえた。Âu は仏壇の前の木製の椅子から身を起こして、立ち上がり、Mỹ は二階で昼寝していた。彼女に自分たちの出生を告白する気はなかった。それは例えば Trang がすべきだとさえ思う。彼と Mỹ は近すぎた気がした。サンダルを地面にこする背後の雑音が Âu のそれであるには違いなく Ma とまだ出会っているわけでもない Trang にとって、彼女が知っているただ一人の男の匂いが周囲から立つ。日差しが直射して、こんな時間を経験するだろうことなど、予測もしなかったことに気付く。まぶたに光が差す。海の匂いなどしない。空気が湿っている。海辺の町にしかない湿度だということを知っている。Trang は振りかって何を言うべきか言葉を捜してみた。湿気てくぐもった空気がアオヤイと腹部の間のわずかな空間を澱んだままゆらいた。細い路地に入って、雑な土の道のでこぼこをサンダルの上で皮膚を感じる。迫った家屋の白い壁面がしざしを反射して、視界をかすかに白濁させるが、その向こうの空の色彩は重ったるほどに青い。大通りに出た瞬間に、交通量の多い主管道路の騒音が飛び込んできて、いつの間にか踏み越えてしまった境界の痕跡を探す。目を細めた眼差しが光の中で焦点を調節し、隔てるものの無い空間に光はじかに彼らの皮膚に触れた。自分たちの足音が空間の一番底部から聞こえてきて、Trang は向こうにドラゴンブリッジを見る。空に差された鉄骨の黄色い塗装が光の複雑な反射に色彩を喪失する。まるで、その龍の貌は犬にしか見えない、と Miên ミエン は言った。丸顔の小柄な Miên は日本へ留学した。四歳も年上だったが、日本語学校で知り合った。フェイスブックで彼女が今東京で働いているのは知っていた。何度かメッセージでやり取りした。川べりの、橋の下の日陰に逃げこんだ瞬間に Trang の肩を Âu を押さえたが、身じろぎして拒絶しようとする Trang のいい加減でわがままな媚態に Âu はうんざりした。Linh リン という女が彼女たちの母親だと Âu は言った。彼女は子どもを一人抱えて離婚したばかりだった。両親は死んでいて、家族との折り合いは良くなかった。Hiệu という名の男がその男だ、と言い、スマホの画像を見せたが、Trang は表情一つ代えもせず、その瞬間に Trang が知ったのは自分が父親を殺してしまった事実だった。前夫の名前は Thiên ティエン だった。離婚した理由は Linh に新しい男ができたからだった。Thiên との間いつまでも子どもができないのが不満だった。Hiệu とは Thiên の妻だった頃から付き合っていた。最初の子も彼が生ませた子どもだった。その子どもは俺だ。言った Âu を振り向きみて、Trang はお母

さんは？ 言ったが、死んだ、という Âu の言葉を信じることはできなかった。そんなにた易く人間は死なない。惨めなくらいに生き延びて、力尽きて、未練たらたらで穢らしく死んで行く。筋弛緩症が Linh を蝕んだ。頭が悪くなったのだ、と Âu は説明した。まるで自分で飛び込むように。ドラットを降りた高山の崖をまわった道路からバイクごと飛び降りた、そう言う Âu に、けれども、と、自殺かも知れない、あなたは、事故かもしれない、と、それを見ていない。それは分からない、と、言った Âu に Trang はうなづく。みんな知っているのかと言う Trang に Thiên も知らないはずだと答えるが、本当のことはまだ彼自身は知らないことに自分自身、やっと気付いた。父親に会いたいかと言う Âu に、会ってどうするのか、何ができるのかとややあって返答をくれた伏目の Trang に、確かにそれは必ずしも彼ら自身には関係しない他人たちの問題だという気がしたが、お前は どう思う？あの日すべてを白状し乍ら Hiều は言って、Âu の顔を何度も伺い見たが、彼に答えるすべはなく、びっくりした、としか言えない。半部以上、自分の返事が嘘であることさえ Âu は自分で知っていた。確信し乍ら Hiều を問い詰め、告白させたのは Âu 自身だったのだから。半分以上、Hiều の告白は嘘とでたらめにまみれている気がした。彼の語る Linh の美しく清楚な印象と、Thiên たちが語った乞食の Linh の印象との間には信じられないほどの遠い隔たりがあった。いずれにしても Âu の目の前の Hiều は結局のところ敗残した人間にすぎなかった。自分の娘のような女たちに顎で使われ、そのたびに媚びた笑みを浮かべた。今は楽しんでる、と、彼は Âu に言い、何を？人生を。Âu は一瞬、ドラット近くの高山の町で、彼らが繰り広げたと彼自身が語った悲恋の物語をふたたび追想したことに気付いた。理不尽なほどに誰も自分たちの味方はしなかったと言う Hiều は、にも拘らず今は誰も恨んではない。世界中を敵に回した気がした。Thiên は朝から晩まで金、金、金で、心らしい心さえ持っては居ないその Thiên に虐待される気の弱い優しい Linh を誰もが馬鹿者だと言った。ほしがっていた子どもさえ Linh に妊娠させられなかったのは Thiên の責任だということを、Linh は無言の内に証明したかったのかも知れない。初めて彼女を抱いたとき、Hiều は彼女がだれにもふれられてさえいない気がした。その実感が、彼女の誘いに乗った彼の後悔を寧ろ忘却させた。自分が犯した罪など、実際には始めから存在しなかった気がした。姦通を告白したのは Linh のほうだった。二回目の妊娠を彼女が確認したときに、Linh は Thiên に事実を告白した。そんな事は誰もが知っていたはずだったと Hiều は思う。Thiên は Linh に手を出してさえいなかったではないか。自分が手をつけてもいない女が妊娠したことを Thiên はどの面を下げてあんなにも喜び、溺愛したのか、そのころの内が Hiều には理解できなかった。Âu を奪われた Linh は衰弱し、子どもなど生めはしないと誰もがうわさした。独りで市場に買い手のつかない雑貨を並べた。Thiên がそれでも彼女にいくらかの資金援助をしているらしいことは Linh に聞いた。Hiều 自身にできることは何もなかった。若い十八歳の Hiều に五歳年上の彼女をすくってやる手立てはなく、彼の両親は半ば彼を監禁しさえして、息苦しい毎日の中で、Hiều は自分のしたすべてを後悔すると同時に、Linh のことを許した。彼女にとって、唯一優しくしてくれた彼を愛するのは為すすべもない自然な感情で、Hiều としては彼女を受け入れる以外に為すすべもなかった。生まれた子どもが双子だったということと、Linh が朝から晩まで吐いてばかりいるということを知られたとき、Hiều はニヤチャンの親戚のホテルを手伝わされていた。ことの始末が付くまではドラットに帰ることはできなかった。ビルに邪魔されて見えない向こうの山脈にかかった雲の上のあの朝霧に包まれる町で、病んでいく Linh を思った。筋弛緩症の、時に自由が効かなくなる手でバイクに乗って、うねった道路を崖に突っ切ったとき、Linh が見た風景はどんなものだったのか、翻った足の下にコーヒーの葉の無数の広がりを見たのか、頭の下に松の樹木の空を穢してやろうと企んだかのような、暴力的な侵略の群れを見いだしたのか。Hiều はドラットを降りるとき、周囲の岩石

のあたまたの遙か上にまで広がった、鋭角の抽象的な色彩の連なりを見上げた。斑な色彩が美しいとも穢らしいともいえない無機質な傍若無人さでそれ自らを曝し、草花が彼らをしづかに侵食していた。食いちぎられて砂化されられながら、そして夥しい草花は小さな花々を点在させる。Sài Gòn から帰ってきた Hàng ハン と Sủy スイ は秘密だと言った。誰にも言ってはいけない。日本語の勉強を薦めたのは Hàng だった。二十歳になる2人は十分に美しく、一年ぶりに見る

Trang が醜くはないことに Sủy は驚いた。眼ばかりぎよろつかせた、痩せた無様な少女の記憶しか彼女にはなかった。Sủy が泊まったホテルの部屋の中で彼女と話していると、ベトナム人の大柄で町を歩く中国人や韓国人のような格好をした男が入ってきて、Sủy が大袈裟にはしゃぎながら部屋を出て行った。ゴルフ場から帰ってきた日本人たちの部屋に行ったのだった。彼らとは Sài Gòn で会ったといていた。カラオケ＝ナイトクラブの客だった。金払いが悪いくせに、と、Hàng が言う、中国人のように体ばかり求めるが、時に射精もしないで萎えてしまう。声を立てて笑い、目の前に立っているベトナム人と自分が何をすればいいのか、何をすることになるのか、Trang は気付いていたが、初めて会うその男には見覚えがあった。Âu に告白されるまで、その男の名前は知らなかった。名前を名乗らなかった男を Trang は頭の中で、とりあえず兄の名前を援用して、Âu とだけ呼んでいたが、Hiềuはそのぎらつた眼差しの少女が、何も自分に対する欲望に飢えているがためにぎらつかせているいるわけでもなくて、単に大きい眼がそんな風に見せているだけだと気付いたときには彼女の体は自分の下にあった。抱きつこうとする逃げ出し、逃げ出しても声さえ立てず、Trang は自分が何をしなければならぬのか知っていて、それを受け入れるかどうか、その下されない決定の猶予を楽しんでいたのかもしれない。ベッドの上を撥ね、立ちそうになる笑い声を我慢し、息を乱し、自分を見つめる見開かれた彼女の眼差しを Hiều は見詰めながら、意識しないまま振り上げた Âu の指先が自分の頬を不意に強打したときに、まるで Trang はありえない暴力になぎ倒されたかのように床に倒れ伏す。何が起こったのかわからないままに Hiều は無抵抗な彼女をベッドに乗せて、Âu が自分を強姦していた。壊し、穢し、もう二度と生きられなくするために。彼は自分の全てを駄目にするため腰を使い、そのたびに自分ひとりが破壊された。その実感が、見開いた眼差しの内側に目覚めていて、Trang は自分がしていることを信じられなかった。つまらない女だった。頭がおかしいのに違いないと Hiều は思ったが次の日、町を案内してやった日本人が彼にわたした一枚だけの一万円紙幣がたかが数枚の50万ドンにしかならなかったときに、うしろを見られた気がした Hiều は自分でも気が遠くなりそうなほどに激怒した。Maが帰ってこない内に、Âu に連絡された Trang はバイクを走らせる。海岸から離れた安いホテルの部屋で彼が Trang を呼んでいることは知っている。夕方の日差しが街の空を斑の紅に染めて、その見苦しいむごたらしさは Trang を惨めな気持ちにさせた。長くなった影が止めたバイクのそれと重なって、アスファルトに這う。階段を上がって、受付には誰も居なかった。部屋番号は知っていた。三階まで上がって、その部屋をノックするまでもなく、開け放たれたドアの向こうには Âu が上半身裸でテレビを見ている。付けっぱなしのテレビの音声が耳の中に木魂し続けて、自分をだけ裸にしてしまった Âu にドアを閉めるように言ったが、誰も来はしない。誰も居ないから。この階には、そんな事は Trang も知っていたが、飲んだビールが自分を上気させているのに Hiều は気付いている。目を閉じた彼女のまぶたに顔を覆い被せて、汗ばんだ彼女とその乱れた髪の毛の匂いを家具が、彼女の名前などまだ知らない。いつの間にか巻きつけられた手のひらが自分の首を絞め、時にじかに触れられる頸動脈が悲鳴を上げそうになる。何度も息を切らしながら腰を振って、誰も帰ってこない内に終わらせてしまおうとするが開け放たれたままのドアの向こうに見える通路に人影などまだない。飲みすぎたアルコールが明

らかに Hiêu の射精を阻害して、射精しそうになっては息絶えたようにしそこなう。何度も繰り返させるその感覚を、何だか感じようとした瞬間に気が遠のいて、視界は白濁することなく色彩を失う。酒臭い失心したÂuを押し倒して仰向けにひっくり返したとき、Trang は首を絞めて殺してしまったに違いないと確信したが、匂いをかぐために近付けられた鼻先が彼の息遣いを捉える。殺す気はなかった。彼は死んで居なかった。自分がまだ誰も殺しては居なかったことにおののいた。一瞬、何を迷うでもなく迷った透明な無色の時間がすぎて、気が付いたときには彼女はÂuの首を絞めている。息絶えたことを確認してさえも、その後数回首を絞めた。生き返られることが不安だった。明らかに死んでいるに違いなかったが、失心した内に死んでしまった Âu の死体を殺したという実感を、なかなか得ることができなかった。Âu の告白を聞きながら、自分のやったことを了解しなければならないのだが、Trang はそれが億劫で仕方なかった。考えられるべき未整理な部分が多すぎて、Trang をただ憂鬱にさせた。橋の下に、バイクの群れが止まって、何か彼らは一気に離れ始めた。同じベトナム人の、人より年上の集団だった。ふとっついて、明らかに自分よりその美醜において劣っていたことを確認した。Ma が帰ってこない日に、部屋を抜け出して、そのまま転寝するテレビの前の Thiên の横を通り過ぎる。Âu たちの部屋に行くと、彼の間に寝転がり、裸のままで眠っていた二人を起こす。Âu に絡まりついて、Mỹ が自分の尻を引っぱいたことに気付いていた。萎え切って、かさかさする Âu のそれが、彼女たちがもう終わっていたことをふたたび感づかせた。部屋に入った瞬間から、そんな事はすでに気付いていた。かたわらで Thanh が笑いながらベッドから這い出して、壁際に座り込み、Trang に笑いかけた。いつもこの少年は自分たちを見ていた、と Trang はいまさら、何度目かに気付く。自分たちのすべてを知っているのはあるいは彼かもしれない気がしたが、日差しに眼を奪われる。晴れてしまえば直接、熱帯近くの鮮烈な日光が肌に、目に、髪に、それが触れ獲るあらゆるものに素手で触れる。幸せではないが、破綻など何もなかった。なにものも破綻しえないのかもしれない。Thiên も Tuyêt も何かの努力をしようとしていた。それを Âu は知っていた。いつもお互いの眼差しがあった。何かを支えようと努力しあっていたが、そんな必要など最早無いことにも気付いていた。Âu も Mỹ も Trang も、何かに満足しているわけでもなく、何かに飢えているわけでもなかった。外国人にたぶらかされた Trang の将来だけが心配だったが、自分たちにまともな将来がないことも事実である気がした。夜の七時、Âu が帰ってきた時カフェはすでにしまっていて、Thiên はリビングスペースとガレージを兼ねた空間に、寝転がっていた。テレビはつけっぱなしだった。Tuyêt が応接椅子に座って果物を剥いていた。その横に Mỹ が顔を上げ、Âu の帰宅を確認した。奥に入って手を洗い、顔を洗った。髪をかきなぐった。ヘルメットの押しつぶされたそれが不快だった。リビングに戻ろうとしたとき、Mỹ とすれ違いそうになり、不意に彼女を抱いた。誰も見てはいなかった。壁の向こうだった。なぜ、隠されなければ為らないのか、疑問が芽生え、突き刺さった。自分たちの問題が、彼らの問題でなどあり獲るはずがなかった。そのまま Mỹ を羽交い絞めにして、彼女の少しの抵抗に、なにを？と Mỹ は思う。今ではない、と思った。いずれにしても今日ではない。Âu の腕の中でもがいている Mỹ を彼らは見だし、眼差しは彼女を見上げ、Mỹ は気づかれた、と思った。見られた彼らに逃げ場所はなかった。声はなかった。重なる息遣いだけが交錯した。Thiên の眼差しが、そして、Âu が Mỹ の体を明らかに男としてまさぐって、彼女に口付けた時に、彼はなぜ Âu がそれを知っているのか疑問に思ったその刹那に、確信されたのは Mỹ の裏切りだった。彼女が密告したに違いなく、女としても娘としても、Thiên は今彼女に裏切られていた。いくつもの感情が絡まりあって、同時に彼を鼓舞したが、手に奪った果物ナイフを Tuyêt が奪い返そうとしたときに、悲鳴がたった。誰もが、刃物が Tuyêt の腕を傷つけてしまったのを知った。感情が髪の毛をかすかに震わせることを Mỹ は初め



て知った。手遅れだった。Thiên は彼女を刺してしまったことに気付いた瞬間に、寧ろとめどなく全てに崩壊されてしまう前に、Thiên が Tuyết の腹を刺したのを Mỷ は見詰める。間違っている、と思う。あなたが彼女を殺しても仕方がない。誰にも、何の意味もない。Mỷ の視界の先で Tuyết が身をよじるが、声さえ立てられないまま、もうすでに、と Mỷ は思い出す。彼らは死んでしまっていた。私が、殺してしまったから。思いあぐねた数秒の後、握られたままの刃物を自分の喉につきたてた Thiên に、浅すぎる、と Âu は思う。その、死に切れない浅さが寧ろ Âu をおののかせる。あなたが、Âu は、私に殺されたいなら、思った。ナイフを手にとって、陸に上がった魚のような Thiên の口は、今、呼吸するのを忘れていた。眼差しに直視されたまま Thiên の喉に刃を立てる。望んだことを、そのままに、あなたに。Thiên の口が、そして Âu はわたしに？ 私にも、私の望みを。父親を殺す。自分の血にまみれる。なぜ？ 知ったから。大切な何かを知ったから。すべて、とはいかにしても言えない小さな過去に過ぎないにも拘らず、無意味な宝物としていじりぬいてやがて壊し腐らせてしまうに過ぎないだけのもの。より正確な死をその身体に刻んでやるために、誰のために？ 誰かのために、自分以外の、自分をも含めた誰かの、そして、Âu が見いだしたのは血にまみれた自分と Thiên の死体だった。Tuyết はすでに死んでいた。自分が彼女を殺せなかったことに気付いた。Mỷ を振り向き見た。声はなかった、テレビの音響だけが空間にあって、開け放たれたガレージのシャッターにもたれかかった Thanh が彼を見ていた。手に持った Bún ブンの袋に、彼が夕飯を買いに行っていたことを知った。あっちへ逃げろ、と、Âu の手の掌がしぐさするのを Thanh は見る。Mỷ の息遣いがあった。二階に上がっている、と Âu は言い、彼女は従うが、なんの動揺もなかった。すべて、彼女に許された気がした。誰か一人にでも許されたなら、それは許されえない過ちとはいえないのだと、Âu は思い直す。シャワールームで体を洗う。あっけなく洗い流される血に、そんなものだ、と思った。何ほどのことでもない。どこにも悲劇など存在しなかったし、痛みも、苦痛も、苦悩も、絶望も、何も、そんなものは何も、思いつくかぎりの一切、何もなかった。彩られた花が咲く。無数に咲き、それらが色彩を鼓舞する。蝶が飛ぶ。空に色彩はない。なにが奪ってしまったのだろうか？、と、そう思った瞬間に、もともと、そうだったことに気付いた。あるいは、まだ与えられていなかったのかも知れない。不意に正気に返って、水を止めて体を拭いた。先に使った Tuyết の体臭がある。女性のそれだった。Mỷ のそれではなかった。いや、と思った。青かった。確かに、空は原色の赤にぎらついていた。ベッドルームで Mỷ は寝た振りをしていた。死んだフリかも知れなかった。聞きただす気は最早なかった。不意に見開いたその眼差しが天井を一度見詰めた後で、流れるように崩れて彼を捕らえた。彼女を求めていたわけではなかった。Mỷ を脱がして、彼女を抱いた。そうするしかない気がした。最後に、結ばれなければ、一度結ばれたことに意味はない。自分たちはこうして終わってしまうのだ、と Mỷ は思った。死のう、と言ったのは Âu だった。Mỷ は自分がまだ生きていることを思い出し、その遅さにおののきさえ感じた。彼に刺されることを望んだ Mỷ のまぶたの閉じられた顔を直視できないままに、寧ろ、Mỷ が破壊されている必要があった。そうでなければ、Âu は自分が愛したものを破壊することになって仕舞う。そんなことを望んだのではなかった。自分を殴打する Âu の暴力に時に白眼さえ剥きながら、やがて失心が彼女の覚醒を中断するまでの十数秒に、意識の一番低いところで Mỷ は自分の血管があたまの中に鼓動の音を立て続けていたのを聞いていた。Trang は？ 木の上で、自分を刺し殺す瞬間に彼女を思い出した Âu は、失ってしまった、と、喪失の実感に苛まれた瞬間を、やがて鮮烈な痛みが全てを白銀に白濁させる。殺した。と、誰を？ あるいは、自分自身を。気付いた。Trang は彼らの惨状を見いだした瞬間に、確かに、自分が父親と馬交り、<sup>まぐわ</sup> 彼を殺してしまっていたことに気付いた。頭の中で弾けた小さな閃

光が、彼女を包んだ拳句、その視覚を奪う。息さえできない、と Trang は思い、もはや、生きてはいけない。生きているはずがない、と、見渡した周囲の中に、あの日本人が彼女を振り向き見る。知った。生きている。わたしは、と、そしてまだ、わたしは生きていた。

十月（神無月）（かみなづき）

四具礼乃雨降（しぐれのあめふり）

山霧（やまぎりの）

煙寸吾胸（いぶせきあがむね）

誰乎見者将息（たをみばやまむ）



2018.02.20-26.

Seno-Le Ma

シュニトケ、その色彩 下

<http://p.booklog.jp/book/123172>

著者 : Seno Le Ma

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/senolemasaki0923/profile>

ホームページ

<https://senolema.amebaownd.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/123172>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト